

平成二十七年気良歌舞伎

箱根靈驗誓仇討

瀧の場

配役

飯沼勝五郎

勝五郎女房  
初花はつはな

月の輪実八  
奴やこ筆助ふですけ

滝口上野こうずけ

母 早蕨さわらび

勿川久馬はねかわきゆうま

あんこうの次郎

なまこの八

男 大勢

男(一) ヤレヤレ皆の衆や、有り難い今日の御施行、こんな結構な法会に逢うた事は無いじやないか

男(二) そうとも、そうとも、一体こんな法事をなされるのは、どなたの御年忌やぞい

男(三) その事よ。今日の法事は、北条様とやらの五百年忌のお取り越しを、この阿弥陀寺での御施行じやそうな

男(四) 一人頭、錢一貫匁も貰うし、久し振りにおいしい物にありつけると云うもの

男(五) それでは、これから出かけましょうか

皆々 それがいい、それがいい

へ忠孝の身にも因果や巡り来る 片輪車の飯沼を乗せて綱手を初花が

非人施行と書いた札 うれしやここと立ち寄って

初花 申し勝五郎さん、ここらあたりは山家ゆえ、紅葉のあるに雪が降る、さぞ寒かったでござんしょうなあ

勝五郎 イヤイヤわしは車に乗っておれば辛抱もしかたないなれど、か弱きそなたが引く苦勞、過分なぞや、嬉しいぞや

初花 アレまた、そんな事を言わしやんして、女房に礼言う者があるものかいな、それはそうと此の阿弥陀寺は、氏政が菩提所、今日の施行を幸いに、仇の安否を

勝五郎　こりや

へと、辺りを見回す

勝五郎　めったな事を、壁に耳、心を付きやいの

初花　あいあい

へと、呑み込み気を配る、折からどやどや非人ども、振る舞い酒の戻り足、初花それを見

初花　もし八さん、次郎さん、月の輪さん、何ぞよい貰いがあつたかして、打ち揃そろうて、よい

機嫌、そうして施行せぎょうはまだ有るかえ

へ尋ねに次郎は目を据えて

次郎　何じゃ、施行せぎょうはまだ有るか無いか、行って見りや知れるわい。いったいまあこの次郎さ

んにすべらすべらとぬかしおるのはどこのどいつじゃ

へと、足ひよろひよろ、月の輪吹き出し

筆助　はっは、こいつめんよう、喰いしめること腹立ておる。こりや、いざりの女房じ

やわい

次郎　何じゃ、いざりの女房じゃ。なるほど、こりや女房じゃ。そのいざりの女房が胸くそが

悪い、一体まあいざりのくせに何であんない女房を持っているのじゃ。ぎょうさんな

札を立てくさって、米ならわずか二合か三合、銭なら百文位と思いのほか、一人前に銭



次郎 何が有り難い。忌々しい。おれは腹が立つわい、立つわい

八 おお勿体ない、勿体ない。おれはもう勿体のうて悲しゆうてどうもこうもこたえられぬ  
筆助 こいつはたまらぬ、腹がよれるわい

へと、うちこけて腹を抱える、笑い上戸、泣き上戸、めったやたらに腹立上戸、果ては一蓮托生に、  
皆々倒るるその風情、笑いこぼれて初花が

初花 こりやとうとう皆寝やしやんしたそうな

勝五郎 イヤ、モウ傍そばで見ている良い慰なぐさみ、次郎奴が理屈の無いこと吐かして腹立あはておる、そ  
のおかしさ

初花 さいなあ八さんの愁うれいの段で、わたしやお腹がよれたわいなあ

勝五郎 ハハ・・・

初花 ホホ・・・

へと、もろもろに笑い上戸の月の輪が、むつくと起きて、両人の寢息を窺い、手をつかえ

筆助 若旦那、勝五郎さま

勝五郎 コリヤ

筆助 ハハ、只今ただいまこのところにて承うけたまわれば北条氏政、今朝こんちよう、鎌倉を発足ほっそくなし、京都へ参勤さんきんとの

取り沙汰さた

「聞くより飯沼、車を飛び下り

勝五郎 何、氏が政が上洛じょうらくとな。してして上野こうずけもろとも発足ほっそくなせしか

筆助 否いなやの安否は此の筆助、大磯中食おおいそちゆうじきと承うけたまわれば、近寄り様子を伺わん

勝五郎 でかした、急げ

筆助 一刻三里は下郎げろうの金すねやつちよ一席してこいな

「尻ひっからげ大磯さして

筆助 これ八よ次郎よ行かぬかい、行かぬかい。お余りやってくださりませ

「急ぎ行く行く後に夫婦は勇み立ち、天を拝し地を拝し喜ぶこなたに伏したる兩人むつくと起きて

次郎 ヤアうぬは、飯沼勝五郎

八 また初花といおうがな

勝五郎 イヤ我々は左様な者では・・・

次郎 ないとは言わさぬ。今三人が話をば寝たふりしてみな聞いた

八 大磯へうせた月の輪は筆助という、うぬが下郎

次郎 出し抜いたは仏の腕わん、いざり奴めぬかせ

八 ぬかせ

次郎 ぬかせ

両人　ぬかさにや、こうじやわい

「吐かさにや斯うじやとしめかくる腕首つかんで双方どっさり手練と手練とに両人がコリヤ叶わぬと逃げて行く

初花　狼藉ろうげきなせし両人は、もしや敵かたき上野こうずけめの

勝五郎　めったに油断はならぬぞよ

「油断ならじと勝五郎見廻す後ろに立て切る障子さつと開けば

「滝口上野火鉢にかかり、くわんくと見下す敵は優曇華の時待ち得たる対面と初花諸共つめよって

勝五郎　ヤヤ、珍らしや、滝口上野たきぐちこうずけ、汝を討たんと此の年月、艱難かんなん辛苦しんく致せしぞや

初花　その方ゆえに父上はむざむざとご切腹

勝五郎　思いは同じ兄の敵かたき

初花　父上の仇あだ

勝五郎　サア尋常じんじょうに

両人　勝負、勝負

「勝負勝負と詰めよったり

滝口　ムム、ハツハハハ・・・うぬら両人じたばたしたとて此の滝口に齒が立とうや、汝が兄

の三平たださえ、只一ト討ちこうずけにせしこの上野、腰抜けの分際で敵討ちとはしやらくせい、う

ぬら兩人、箱根あたりをへちもうと聞き釣出す為の施行、計略のワナとも知らず、うか来かゝるうつそり共、最早八方取巻けば、いくらあがいたともう叶わぬ、此の滝口が思いをかけし初花を身共に渡して其の方はいさぎよく自滅いたせ

勝五郎

ヤア、たとえ腰膝立たずとも、やわか初花渡そうか

滝口

ナニならぬと言うか、コリヤ、初花、わりやどうだ。頭振るは嫌か、ハテサテ、悪い合点、此の滝口に從えば、活計歓楽、心のまゝだサア応と言や、応と言や

初花

たとえこの身は死するともおのれに枕を交そうか

滝口

そりやこの滝口が心には、よしよし……今目前にてほえ面かかし、なびけてみしよう、ヤアヤア久馬、縄付、これへ……

顔  
へ下知の下いつの間にかは早蕨を引立て引立て立ち出ずる。それと見るより二人は仰天、絶えて久しき婿娘のう、懐かしやと言いたさも身は猿の猿ぐつわ、泣くよりほかの事ぞなき。上野はしたり

滝口

なんと見たか。この滝口が奥にさえなれば九十九の家を取り立て早蕨めを姑と崇めてくれん。嫌となれば腰ぬけもろ共なぶり殺し。いやか、応か生死の境、初花、返事はド  
ドどうだ

へ非道の言葉をさし当たる、人質とられて初花も、共に無念の勝五郎、齒ぎしみ齒ぎしみ胸先へ差

し込む癩

初花 時も時とて此の癩しやつき気は何事ぞ、せめて筆助なりと居やったら

久馬 コリヤコリヤ女、其の奴やつこは出し抜いて、後より多勢を向けたれば、今頃はもう寂滅じやくめつ、思案しあん

しかえて滝口様へ従えば、其の身の幸せと言うものだ

滝口 応とさえ言えば其の腰拔諸共助けてやるが、そちへの心中、人我につらしのたとへ、魚

心あれば水心、コレ初花、なんと憎うは・・・あるまいがな

「猫なで声の面憎さ、喰い付いても思えども、眼前母と夫の命、我が身一つに此ぶれば何の惜しかりじと思えども、現在敵に肌ふれて枕を交す苦しみは、身は八つ裂きの刑罰と思えば胸も張り裂けて、泣く音血を吐く思いなり

「滝口は笑壺のり、しづしづ庭へ下り立て

滝口 コリヤ飯沼、イヤサ勝五郎、なぜ勝負をせぬ立ち合わぬか、立ち合わぬか、かわいやこいつ足が立たぬか手もかなわぬか、さぞ口惜くちおしかろう、このようななりをして敵討かたきうちははしやらくせえわい。

「砂にすりつけ、にじりつけ

滝口 コレ初花、これでもいやか

初花 サアそれは

滝口　もの言わぬは不承知ふしょうちだな、ソレ母から先へ刺し殺せ

久馬　心得ました

へだんびら引き抜き差し付くれば

初花　アアこれ、まあまあ待つてくださりませ

滝口　待つてとは、いよいよ自由になるか

初花　それじゃと言うて

久馬　刺し殺そうか

初花　サアそれは

滝口　ソレソレソレあぶないあぶない、得心するか

初花　サア

三人　サア、サア、サア

滝口　初花返事は、ど、ど、どうだ

へ絶体絶命、身の大難に初花が、なんと詮方なき身ぞと思ひ極めて

初花　得心じゃ

滝口　なんと

初花　得心じゃ、得心じゃ、得心じゃわいなあ

滝口　　そんならそちは、おつとあぶない、可愛いやつめ。

初花　　あい、その代わりには、お二人の命をば

滝口　　得心とあらば言うた言葉は反古ほごにもなるまい。命冥いのちみょうが加な腰抜けめ

〽足蹴にどうと蹴倒せば、そのままそこにどうと伏す

滝口　　ソレ縄付けめを許してやれ

〽縄目も一度に解き捨てて白州にどうと蹴倒せば、せき止められし溜め涙、わつと泣きいたる

初花　　アアこれ母様、そのお嘆きはもつともながら、是非に一羽は狩人かりゆうじんの網に掛かった身の

因果いんが。私さえ得心すれば波風納まるこの場、私しやそれが本望ほんもうでござりまする。サア本望ほんもう

じやによつて勝五郎さんの御身おんみを大切に

早蕨　　おお娘。でかしやつた。この母が身ひとつなら、切りきざまれても厭いといはせねど、大切

な婿殿むこどのにかわる其の身は手柄てがらもの。源氏の仇かたきに身を任した常盤御前とぎわごぜんが良い手本、心の

肌身を打ち解けて

初花　　さあ肌ふれるはこの身の覚悟、何事も私の胸に

滝口　　ヤアこの滝口を清盛とは心地よい、心地よいわい。剣を抱いて寝るも一興、しからばこ

れより小田原の菊館きくやかたへ、さあ初花、参れ

〽引き立てられて行く思い見送る思いも鴛鴦おしどりの胸の剣刃呑み込む滝口、久馬も後に引き連れて小田

原見送る母は正体なく

早蕨 コレ婿殿。心をたしかに持つてくだされ

〽と滝の水を手拭いにふくませ勝五郎吞ませ

早蕨 婿殿いのう、婿殿いのう

〽勝五郎、息吹き返し

勝五郎 才才貴方は母上様、して初花はいづれへ参りました

早蕨 才才この初花は滝口に連れられて行ったわいのう

勝五郎 エエそりや初花は敵の手に捕らわれて参ったとな

早蕨 その驚きはさることながら、常盤御前になぞらえて言い含めてやったられば、必ず氣遣い

しやんな

勝五郎 だまし討たんも高の知れた女業、不憫な最期を致させました

早蕨 才才そうじゃ

〽駆け行く裾を引き止め

勝五郎 こりや母人にはうろたえてどこへござる

早蕨 ハテ知れた事、小田原の菊館へ後追うて、娘に加勢をするわいのう

勝五郎 ササお心急ぐはもつともながら多勢の件へ踏み込んで親子もろとも三途の道連れ、ま

ずまずお待ちなされませ

早蕨　それじゃというて

勝五郎　せめて貴方あなたはお命まっとう、一遍いっぺんの香花こうはななりと手向たむけてやっってくださいませ

〽頼む夫も頼まるる母も涙にくづ折れて

早蕨　幸いお寺に鉦し向香してやりましょう

〽亡き身と聞けば力なくせめて来世を助けんと常念仏の法の縁

勝五郎　俗名初花願生菩薩

兩人　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

〽女ほど実に恐ろしき者はなし、恋いにこつては千刃の剣の中もいといたなく、ようやくのがれ駆け  
戻る

初花　勝五郎さん、ようここにいて下さんしたなあ

〽しがみつづく母親は顔見てびっくり

早蕨　そなたは娘、恐ろしい敵の中、どうしてここへおじやったぞや

〽嬉しい中にも気はそぞろ勝五郎面を荒げ

勝五郎　我を慕したい帰りしは貞心ていしんとは言いたけれど夫婦の縁も今日限り、妻ではないぞ、女房でな

いぞ

初花 ソリヤまたどうして、なぜに

勝五郎 ヤア何故なげとはうろたえ者め。女でこそあれ、近寄るこそ幸い、なぜ刺し違えて相果あいはてぬ。

命を惜しみおめおめと立ち帰りし不覚者ふかくもの。何を言うてもこの体、一足だにも引かれぬ苦痛、アア足が立ちたい立ちたい。さあらばとて思い込んだる我が存念ぞんねん、やわか晴らさでおくべきか。

〽用意の刀、杖となし立たんとすれどふみとめず、どうと転びつ這い回り

勝五郎 あさましや口惜くちおしやなあ

〽いかに天命尽くればとて得がたき時の際となり

勝五郎 神も仏もかほどまで

〽見放し給うか口惜しと大声あげて叫び泣き、初花それと打ち見やり

初花 ソレそのように業病ごうびょうを悔やましやんすが、いとおしさゆえ、お前の機嫌きげんをそのうとて、私しや戻ってきやせぬ。もうもう言うに言われぬ切ない悲しい憂うれき目をして戻ってきたのは残った願がんが満てたさに

早蕨 娘、何と言やる、残った願とは何の願

初花 ササ母様にはご存じ無いはず、そも鎌倉を出でしより夫の業病ごうびょう、敵が討たれぬ討たれぬと悔あはしむ主あるじより妻の身で、傍そばで見る目の

いとおしさ

初花 今一度本復させまして兄御の敵を討たせたく、私が命を替わりに立てこの箱根の権現へ  
祈誓をかけ、今一度で満つる願、何の死のうぞ死にやせぬ、死にやせぬ。幸いここに流  
れおるこの水上は向こうの滝津瀬、白滝と心に念じ権現納受ましますか、験をここに  
試してみん

いかがいしくも身づくろい駆け寄る山路に散り敷く紅葉、ざんぶと飛び込み、どうどう落ち  
来る水を結びあげ合掌したるその有様、身の毛もよだつばかりなり、操を感じ母夫合掌したる後よ  
り伺いよつたる勿川久馬

久馬 飯沼覚悟

い飯沼めがけ切り込むを心得、ひらりと飛んだるはずみ、久馬の首は花火の白玉虚空はるかに飛び  
散つたり、母は驚き

早蕨 や、そなたは足が立ったかいなあ

勝五郎 イエイエ足が立つほどなれば、かような苦勞はいたしませぬ

早蕨 それでも足が

勝五郎 エ、足が……。立ちました、立ちました、立ちました。さてこそ初花が念力の、奇特頭  
れしか、ちえ有り難し、かたじけなし

早蕨　　これ娘、そなたの祈誓は届いたぞや

〽言うに初花両眼開き

初花　　そりや権現納受ましませしか、ああ嬉しや喜ばしやなあ

〽言うかと思えしが小袖のみ流れて行くこそ怪しけれ、折から一つ的首引つ提げて戻る奴の筆助が

筆助　　若旦那様、初花様には敵上野が手にかかり、あえない最期口惜しゅうござりまする

〽わつとひれ伏す忠義の涙、飯沼不審晴れやらず

勝五郎　　ウム今近、これにありつる初花、心願満つるとそのままに姿は消えて小袖のみ、ここに

残りし一つの不思議

筆助　　ナニ初花様が今までここにござったとな

早蕨　　おいのう、娘の祈願で婿殿の足が立ちましたわいのう

筆助　　ナニ若旦那様のおみ足が、もしちよつと立ってご覧じませ

勝五郎　　こうか、こうか、こうか

筆助　　立ったわ、立ったわ、立ったわ、足が立ったら

〽千人力

筆助　　敵の様子うかがわんと大磯へ駆け行く道にて多勢の組子、無二無三に斬り込めば下郎

の手並みに皆散り散り、その後見れば女の死骸、よくよく見れば初花様。おのれ上野一

討ちと後追おうと存じましたれど若旦那の御身おんみの上うえ氣遣いさに戻って聞けば、おみ足が立った嬉しさ、初花様の御最期ごさいじで悲しいやら、うれしいと悲しいと、どがらちやがら、ねっから訳が解らねえ、こりやまあ夢ではねえか

〽夢ではねえかとあきれ顔

勝五郎 さては我が言葉を守り上野こうずけを恨まんと斬りつけたれども女業おんなわざ、返り討ちになつたるか

筆助 これこの首が初花様

勝五郎 どれ

〽見せる現世の面影を見るに目もくれ勝五郎

勝五郎 かわいや、かわいや、かわいやなあ。あっぱれ貞女ていじよでかしたなあ

〽悲嘆の涙にくれいたる

勝五郎 イヤ何、母者人。御寺へ葬りご苦労ながら御向香を

早蕨 そうしましろう

〽御寺をさして立って行く、かかる嘆きのその折から、以前の非人どやどやと大勢引き連れ駆け来たり

次郎 ヤアヤアいざり、最前は手ひどい目に逢わしたな

八 今度は大勢連れてきた。もうかなわぬと観念せよ、いざりめ返答は何と何と

「何と何とと呼ばったり

筆助 以前の手並みにこりもせず取らるるもの取ってみよ

次郎 それ

「むらむらぱつと逃げ散ったり追うも無益と勝五郎

勝五郎 こりやこりや筆助、まさしく敵上野は氏政が同勢どうせいに紛れいったに相違ない、勝負の場

所は箱根の絶所ぜつしよ、先に廻つて其の方は

「いちいち同勢あらためよ

筆助 面白いなあ、面白いなあ、面白くなっておいでたなあ。加勢いかほどあるとても下郎が忠

義の切っ先にて

「切り立て、切り伏せ、上野奴を引きづり出すは、またたく内

筆助 早くおん立ち

「と勇み立つ

勝五郎 筆助つづけ

「武運も光る玉くしげ、箱根を差して急ぎ行く

—幕—